

Title	ベルリンのズルツァー : その生涯と活動の振幅をめぐる素描
Author(s)	福田, 覚
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2005, 5, p. 23-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77694
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ベルリンのズルツァー

——その生涯と活動の振幅をめぐる素描——

福田 覚

ベルリンのアカデミーの歴史を書いたハルナックによると、「スイス人学者の流出は、17世紀と18世紀には、徒歩傭兵の徴用と同じくらい特徴的な現象であった。ミュンヘン、ベルリン、オランダ、ロンドン、パリ、ペテルベルクと、到るところでスイス人の教授に遭遇する」状況であった。¹ 本稿で取り上げる哲学者ヨハン・ゲオルク・ズルツァー（1720-79）も、祖国を離れてプロイセンのアカデミズムの世界に加わったそのようなスイス人の一人である。

ズルツァーは、ベルリンのアカデミーでは哲学部門に属していたが、その知的関心は幅広い。ベルリンに赴任したのは数学教授としてである。自然学について著述し、自然美についての対話も書き残している。また、教育の分野で国王の信を得て、学校教育の改善に取り組んでいる。ポドマー（1698-1783）とは長年書簡を交わしていて、最も知られた著作は晩年の美学事典である。このようなズルツァーの多面的な姿を特定の型に嵌めて理解するのは難しい。1781年の哲学論集・第2部に添えられた伝記には、次のような一節がある。

「ズルツァー氏の活動的な精神は、人知のあらゆる面に通じていたいと望んでいたし、彼にとっては、人知のなかでどうしてもよいもの、軽視してよいものというはなかったように思われる。そのようなズルツァー氏は、ヒルツェルの語るところによれば、幾人かの友人から、プロイセン国家の内的なしくみ、『統治の鎖のなかにある様々な人の輪』について知ろうとしたし、別の箇所から明らかのように、農業について、技術や手工業について、商業その他について正しい概念を得ようと努めた。そして、アカデミーや学校と同じくらい作業場や帳場を訪れた。」（B52）

本稿は、今後ズルツァーの思想的な振幅や学問観について論じるために、その下地の形成に関わっているであろうズルツァーの外形的な生活等の環境、とりわけベルリンを舞台としたその生の歩みを、複数の角度から概観するものである。

1 プロイセンの王都へ

ズルツァーは、スイス・チューリッヒ州のヴィンタートゥアーの生まれである。両親が発疹チフスのために同じ日に亡くなったのは、彼が14歳の時であった（L12, B11）。² 1736年、16歳の時に、神学をものにする目的でチューリッヒのギムナジウムに入った。当時このギムナジ

ウムには、博物学のヨハン・ゲスナー、神学のツィーマーマン、芸術学のポドマー、ブライティンガー³といった著名な人物が何人も教員として在籍していたことが知られており、特にゲスナーは個人的に、ズルツァーを薬草集めに同行させたり、物理の実験に参加させたり、そのための道具作りを指示したりした。ズルツァーは、標本のキャビネットや図書室やそこにある道具を自由に使えたとも言われている (B11f)。⁴ またその一方で、ヴォルフの『ドイツ語形而上学』に異常なまでの喜びを見出したとも伝えられる。⁵ そうした事情があって、ズルツァーの精神性に、本来中心的に学ぶ予定であった神学からの距離が次第に生まれたとも推測される。

ズルツァーがスイスを去るのは 1743 年の年末、23 歳の時である (L23)。⁶ チューリッヒの商人シュルテスから、マクデブルクのバッハマン家で家庭教師をする仕事を紹介されたのであった (B24)。『すべての学問とその他の部門の学識についての短い考察』(以下では『学問論』と表記) の初版が出されたのは 1745 年であるから、外形的にはこのマクデブルク時代の産物である。そのバッハマンの家で宮廷伝道師のザック (1703-86) と知り合いになったことが (L23)、ズルツァーがベルリンに行くきっかけとなった。1745 年にザックとベルリンに旅行し、その際、モーペルテュイ (1698-1759) やオイラー (1707-83) や他のベルリンの学者たちと知り合っている (B40)。⁷ ベルリンはこの頃、新アカデミーの設立準備期であった。そして 1747 年、ズルツァーはヨアヒムスタール・ギムナジウムの数学教授としてベルリンへの招聘を受け、マクデブルクを後にする。これには、グライム (1719-1803) が少なからず関わり、アカデミー総裁となったモーペルテュイ周辺ではザックとオイラーも尽力したようである (B48)。⁸

「1747 年、ヨアヒムスタール・ギムナジウムの上述の職が再び空きになった。教会伝道師のザック氏やオイラー氏はモーペルテュイ総裁のところに行き、総裁から国王にその職を私にと依頼して手に入れてもらった。この知らせを聞いた時、私はちょうどブラウンシュヴァイクにいて、満足した気分でそこから馬を飛ばしてベルリンに向かった。」(L24)

様々な混乱が生じたり、幾つか低すぎるクラスを任せられるなど、ギムナジウムの職には不快な面もあったと伝えられる (B50)。そして、後から振り返ると彼の人生のちょうど半ばと言える 1750 年に、ズルツァーはベルリンのアカデミーの会員となる。

「1750 年、ズルツァー氏は勤勉であり同時に幸福であったと見える。先述の二つの著作の他に、この年には先に触れた『自然の美についての対話』が出版された。ズルツァー氏はこの年再び故国を見た。そしてその年末には、彼の心にあった二つの重要な願望が実現した。コイゼンホーフ嬢を手に入れ、同時にベルリンのアカデミーの会員となったのである。」(B53f.)

モーペルテュイがズルツァーのアカデミー入りに期待を抱かせていたにも関わらず、事は順調には運ばなかった。「誰かがモーペルテュイ氏に対して私のことを悪く思わせていると推測せざるを得なかったが、彼が私を嫌がる本当の理由は決して分からなかった」、とズルツァーは自伝に書いている。その箇所付した註でメーリアン (1723-1807) は、ズルツァーはライプニッツ哲学に心服していたが、オイラーは、モナド論を主題とした懸賞をモナド論を否定する極めて粗悪な論文に与えるほど、それをひどく嫌っていたことが理由ではないかと推測している。ズ

ルツァーは、枢密顧問官で侍医でもあったエラーの多大な後押しがなければ、アカデミーには入れていなかっただろうと述懐している (L25f.)。

アカデミーの入った建物は、ウンター・デン・リンデンにある。⁹ ヨアヒムスタール・ギムナジウムは 17 世紀初頭に創立された学校で、17 世紀後半に「アルト・ベルリン」に移っていた。この 2 つの場所が、ズルツァーのベルリンにおける主な活動の舞台となった。ズルツァーはいわゆる「月曜クラブ (Montagsklub)」にも参加していた。また、ズルツァーは国王から王宮近くの土地を授けられている。これらは、最初の数年間の間に整えられた、ズルツァーがベルリンで活動していくための初期条件と呼べるものである。

2 アカデミーの哲学者

〈諸学問のアカデミー〉は、実験哲学、数学、思弁哲学、文献学の 4 部門に分かれていて、ズルツァーは、形而上学、論理学、倫理学を扱う思弁哲学部門に属した。

「アカデミーに入った時、私は思弁哲学の部門に配置された。それによってようやく、これまで幾つかの学問に代わる代わる関わってきたためにとっても流動的だった私の研究対象が、最終的に定まった。そして私は、この分野において新しい論件、有用な論件を扱うということを真剣に考え始めた。」 (L30)

ズルツァーは、1750 年から 1765 年までは毎年 1 回、それ以後はそのリズムが崩れる形で合計 21 回の講演を行い、それをアカデミーの年報において公表した。¹⁰ その哲学的内容の論文を集めてフランス語からドイツ語に訳した論集が、1773 年に出版されている。¹¹

ブランケンブルクは、アカデミーに最初に提出した論文「快・不快の感覚の起源」(1751) について、それ以前に書かれたものよりも成熟した哲学的精神を示していると好意的に評している (B59)。また、ズルツァーがアカデミーの年報のために書いた様々な論考は、「明晰性と判明性」を特徴としているとも述べているが、しかしその要因が、以前にヴォルフの著作から精神的な栄養分を得ていたことにあるのか、ズルツァー個人の性格や環境に求められるべきなのか、ブランケンブルクは問いを開いたままにしている (B60)。¹² ブランケンブルクの見る哲学者ズルツァーは、様々な論文で「哲学的な知識を歴史の知識や美学の知識と結び付けた」が、後者の喚起した関心が前者の的確さや徹底性を損なうことにはなっていない。多くの著作は、一定の観察や、「心の物理学」と呼ばれる哲学の分野への貢献を含んでおり、また多くの著作が、人間の本性を慎重に研究したことを証明しているとされる (B62)。

ベデカーは、ヴォルフが哲学と哲学以外の分野を厳密に区別したが、そこにズルツァーも意識的に接続している、と述べている。¹³ 『学問論』によると、ズルツァーの規定する「哲学」は、世界や人間に関係する真理を探究する学問で (§ 187, W140)、その方法論を規定する論理学に支えられている (§ 191, W144f.)。ヴォルフは、ライプニッツの切り開いた道を歩んで、哲学全体の様相を変え、哲学を真の学問にした人物 (§ 189, W143)、ライプニッツ以後に卓越

した概念論を築いた人物（§ 192, W146）とされている。ズルツァーは、哲学を観察的な思弁部門と執行的な実践部門に分けている（§ 194, W148）。そのそれぞれの下位区分に当たる学問でも、その略史のなかでヴォルフには重要な位置が与えられている。

アカデミーの会員になって以後、1750年から1760年までの10年は、ズルツァー本人の言葉に従えば、外的な状況には目立った変化は生じなかったが、家を建てたり、戦争が起こったり、色々と新たな交際が生まれたりして、以前よりも散漫な状態にあったようである（L32）。1760年、ベルリンはロシア軍の占領を受ける。¹⁴そして1761年の春、ズルツァーは最後の出産からずっと病気だった妻を亡くしている。この痛手は深刻で、しばらくどんな仕事もできなかったばかりか、ズルツァーは、残りの人生もずっと仕事ができないのではないかと考え始めていた。この年、沈んだ気分が変わらなかったのも、国王に願い出て旅に出る許しを得ている。1762年春、まずはマクデブルクに向かい、そのあと故国スイスに向けて旅立った（L34）。しかし、1763年に平和が確実にになると、ズルツァーにベルリンに戻るようとの手紙が届くようになる。王が教育施設を計画していて、ズルツァーを必要としているとのことだった（L35）。¹⁵

1764年、本国に呼び戻される英国公使ミッチェル氏に付き添って、8月から11月までまたベルリンを離れていたが（L40f.）、その前後から自伝にアカデミーに関わる記述が目につくようになってくる。ズルツァーがポツダムに呼ばれる2日前にベルリンにやって来たランベルト（1728-77）について、王と面会する機会を設け、それが首尾よく行かなかった後も、ペテルブルグのアカデミーがランベルトに興味を示していることを引き合いに出して、ランベルトを失うことのないよう王に進言し、ランベルトをベルリンのアカデミー会員とすることに成功している（L38f.）。英国公使との旅行後、ベルリンに戻ったズルツァーを待っていた仕事は、法学と歴史の教授を探してアカデミーに提案することだった（L42）。

オイラーがベルリンを去る一因となったと見られる財政上のスキャンダルについても、ズルツァーの自伝に記述が見られる。

「オイラー氏はアカデミーでただ一人まだ実効性のある部門長で、アカデミーの財政的な職務をすべて行っていた。そこで、オイラー氏に対して何度も、アカデミーがかなりの収入を得ていた系図カレンダーが、印刷の点でも銅版画や装丁においても、粗悪になって、最後には誰も買わなくなることが心配される、と訴えた。オイラー氏はこのことを認め、その上さらに、こうした問題のすべてがケーラー主任委員の私利私欲に発している状況を私に話した。・・・それでも彼は、ケーラーの好きにさせる傾向があった。」（L44）

モーペルテュイが最小作用の原理をめぐる論争で威信を失い、国王に辞任を申し出たため、1753年以降の総裁不在の期間、オイラーがアカデミーを指導していた。¹⁶ オイラーとの間では何もうまく行かなかったのも、ズルツァーはアカデミーで公式にこの問題について訴えた。しかし、アカデミーの会員が「オイラーを恐れて」¹⁷ それも成功しなかった。そこでズルツァーは、友人のカットに事態を知らせ、機会を探して、国王にアカデミーの収入管理について調査する必要性を説明するよう依頼した。このことが功を奏し、1765年2月21日¹⁸、アカデミーに対する命令が発せられ、ズルツァーとオイラーを含む6名がこの調査のための委員に指名された。そ

の後、一連の経過の結末として、オイラーがベルリンのアカデミーを去って再びペテルブルグに移ることになったが、その点について、ズルツァーに言わせれば「事情を知らない者」が、委員会を、とりわけズルツァーとランベルトを非難したので、ズルツァーは「正確な真相」を書き記すとしている（L45f）。¹⁹ ここでのズルツァーの筆致は、オイラーに対してとても手厳しいものである。

こうした出来事も含めて、アカデミーにおけるズルツァーの長期間の動静は、より俯瞰的に、「モーペルテュイやオイラーに率いられた反ライプニッツ勢力」²⁰との争いとして描かれることがある。その場合、すでに最小作用の原理をめぐるケーニツヒ（1712-57）とモーペルテュイとの論争にも、その徴候が読み取られる。ハルナックによると、ケーニツヒは「ライプニッツの賛美者で、哲学者としてはヴォルフの弟子であり崇拜者であった。ちょうどその頃、モナド論をめぐる論戦がきわめて激しくなっていて、アカデミーもこの問題で2つの敵対的陣営に分裂していた。ヴォルフの側に立ったのがハイニウス、フォルマイで、まもなくズルツァーがそこに加わった。しかし、敵であるオイラー、モーペルテュイ、メーリアンの方が彼らより優勢であった。王がライプニッツとヴォルフを支持したことが、ケーニツヒとモーペルテュイの間の潜在的な緊張をすでに生み出してしまっていた。」²¹ もう一方のモーペルテュイについてカッシーラーは、ライプニッツの学説を習得しながらも、直接的な接続を避けようとしていた、と評している。²² ケーニツヒは、モーペルテュイが自らの発見だと考えていた最小作用の原理について、すでにライプニッツが発見していて、1707年のヘルマン宛の書簡に記していることを示した。1751年、ある雑誌の3月号にこの手紙の断片を添えたケーニツヒの論文が印刷されると、モーペルテュイは、ヘルマン宛書簡のオリジナルを提示するよう求めた。ケーニツヒはスイス人のザムエル・ヘンツィから入手した写ししか所有しておらず、スイスでオリジナルの所在が調査されることとなった。総裁の要求はアカデミーの要求となり、フリードリッヒがベルン政府に書状を出す事態に到ったが、結局、探し求めた書簡は見つからなかった。1752年4月13日、書簡の真贋についてアカデミーの判断を求める正式の動議をモーペルテュイが提出し、アカデミーは、ケーニツヒが伝えたライプニッツの書簡は偽物で、ライプニッツの名声を高めるか、あるいはモーペルテュイの名誉を傷つけるためのものだと宣言してしまった。ズルツァーも会議に出席していたが、10月のキュンツリ（1728-82）宛の書簡では、ケーニツヒ氏に対する厳しいやり方には同意していない、モーペルテュイの原理はライプニッツの発見と名称が違うだけだ、という主旨のことを述べている。²³ 翌年3月のポドマー宛の書簡では、「ケーニツヒ氏に対するアカデミックな戦争」について、「戦争は以前よりもさらに激しくなるでしょう。というのも、オイラー氏がケーニツヒ氏個人だけでなく、話題になっているこの問題の公平な鑑定者全員を激昂させるような文書を印刷させたからです。この件で中立性を守るのに、私は全力を必要とします」、と書いている。²⁴

1753年に出されたアカデミーの懸賞課題についても、「すべては善し」というポープの言葉をテーマとした背景には、ライプニッツのオプティミズムに対する批判を引き出す意図がモーペルテュイにあり、ズルツァーがキュンツリに賞を取らせようとしたが、最終的には、フォル

マイが意見を変え、メーリアンらがキュンツリに反対したため、またも反ライプニッツ主義者に賞が与えられた、という見方がある。²⁵

しかし、モーペルテュイもオイラーもアカデミーを去る。ハイニウス (1688-1775) が亡くなった年、ズルツァーは国王から哲学部門の長に指名される。ズルツァーはそのことをニースへの旅の途上、ローザンヌで、新聞を通じて知る。そしてその直後メーリアンからの手紙でそれを確かめている (L59)。自伝に付した註においてメーリアンは、ズルツァーがその地位を得るよう取り計ったのがメーリアン自身であることを書き添えている (ibid.)。ブランケンブルクは、このことをより美しく形容している。「ズルツァー氏がプロイセン王の敬意の最後の証明を手にしたのは、この旅行中だった。王は彼がいない間に、アカデミーの哲学部門の長に指名した。」 (B128)

3 教育改革の実践

次に、ウンター・デン・リンデンからシュプレー河畔の「アルト・ベルリン」に目を移して、ズルツァーの教育者としての面に焦点を当てたい。1747年にズルツァーが教授職に就いたヨアヒムスタール・ギムナジウムは、現在の大聖堂と同じ場所にあった古い大聖堂の川向かいに位置していた。²⁶ ニコライ (1733-1811) によると、神学、雄弁術、ギリシア語、文献学、法学、物理学および数学、哲学および歴史の7人の教授がいて、その中の1名がギムナジウムの学校長となるシステムだったようである。²⁷ 「ズルツァーが教職に就いて、若者への授業が巧みであることが有名になると、ほとんど若い人たちの教育で忙殺されて、学術的に磨きをかけるためのほぼ全ての時間が奪われることとなった」(Ha106)、というヒルツェルの文章がズルツァーの授業の評判のよさを伝えている。ズルツァーがこのギムナジウムの教授職から完全に離れるのは1763年なので (B88)、その職を16年務めたことになる。

形は異なるが、ズルツァーはマクデブルクですでに教育経験があった。バッハマン家の息子たちに対する指導の一端を、ブランケンブルクが伝聞で書き記している。

「聞くところによると、ズルツァーは息子たちに対してラテン語の知識を、とりわけ実践あるのみという形で教えた。そのうちの1人は、文法について、あるいは、文法を通じてしか学べないことについて知らないままに、易しいラテン語の著述家を非常によく理解するようになった。」 (B33f.)

より一般的には、1745年と1748年にチューリッヒで公刊された教育論の著書『子供たちの教育と指導についての幾つかの理性的考察の試み』²⁸がズルツァーの教育に対する姿勢を示していると言える。この書の成立の経緯についてブランケンブルクは、おそらく草稿はスイスで書かれていて、ひょっとしたら自らの経験に基づくものかも知れないが、増補改訂²⁹して完成したのはマクデブルクにおいてであろうと推測している。ズルツァーはこの著作の有用性について、「若い著述家の誰もがそうであるように、かなり楽天的な期待を抱いていたようである」

(B34f.)。テキスト全体は9章の構成で、一般的な人間教育が、悟性の教育、感情や意志の教育、外面的な行動やよき習慣の教育といった面から語られている。³⁰ 特に目に付くのは子供の悟性について述べた冒頭の第1章で、「判明な概念と注意力について」、「判断について」、「悟性の能力を鋭敏にする幾つかの特別な練習について」という分節化に論理的な能力の想定とヴォルフ哲学の影響が感じ取れる。「悟性教育の基礎は明晰判明な概念の発展である」³¹というのが、基本命題である。子供を理性と徳と礼節を備えた人間にすることが教育の本質と見て、知識の習得は本来の目的ではないとした点に、ブランケンブルクは、ヴォルフ流で総合的ながら真に哲学的な思考法を見て取っているが (B35f.)、同時に様々な疑問点も書き留めている。

「ズルツァー氏が、すべての提案の際に、人間の真の本性を十分視野に収めていたかどうか、私には分からない。・・早い時期にヴォルフの著作に傾倒したことが、とりわけ最初期の著作において、ズルツァー氏をあまりに教条的にしたのではないだろうか。例えば彼はこの試論において、すでに子供が2歳の時から、判明な概念を教える努力を求めている。・・彼はここで、特に幾何学図形がすぐれて役に立つと見ているが、私が思うに、幾何学図形について真に判明な表象をもつためには、・・多くの他の知識が前提として必要ではなからうか。」(B36f.)

ズルツァーは最良の詩人の作品を読むことの効用も説いている。クリンケの要約によれば、「最良の作家を読むと、よい趣味が獲得されると言われる。新人文主義者のように、ズルツァーは古い言語の教養上の価値を非常に高く評価している。古い言語は古代の思考法の理解に繋がる。読書は古い歴史の知識を伝え、美に対する趣味を形成する。さらには、哲学的教養にも役立つ。」³² しかし、こうしたズルツァーの所見に対してブランケンブルクは、思考の前提は美を感じ取ることであり、想像力と感性が生み出した真の作品は想像力と感性にのみ作用するとの立場から、感じるものと言うより文字通り読むものである古典作家の場合、想像力と感性の優位は維持されないと書いている (B37f.)。ズルツァーの議論は、知識の獲得ではなく思考力の獲得を目指した教育論と捉えられるが、思考力が醸成され作用する諸条件の吟味がさらに問われるということだろう。因みに、この著作や成功した応用事例の評判のお陰で、ベルンブルクの皇太子の家庭教師を依頼されたのだが、ズルツァーはそれを辞退している (B40)。³³

自伝によると、新たな教育の舞台であるベルリンのヨアヒムスタール・ギムナジウムの環境は、ズルツァーにとって思わしいものではなかった。

「ギムナジウムに得た私の職場は、きわめて不快なものであった。そこで学ぶ多くの若者には、適切な規律の影もなかった。最低限の権威を持ち合わせている教師もいなかった。その点で教師たちは、ギムナジウムの独裁的な学校長を通じて権威を保とうとしていた。しかし、私の職務に基づいて、さらには職務を取り仕切る誠実で適切なやり方を通じて私に与えられるべき権威を、迂回路を経て追い求めるというのは、私の性格にはまったく合わなかった。／一生懸命若者の役に立とうとしても何一つ思い通りに行かず、その際さらに数々の逸脱行為や混乱を目にすることになり、それらを是正しようと努力したが無駄だった。そのため、私の仕事は私には大変重荷となっていった。もしも特殊な利害によ

て少しばかりの忍耐を保っていなければ、私の前任者のベグリン氏のように、自発的に辞めていたことだろう。」(L26f.)

しかし、このギムナジウムをめぐるズルツァーの自伝の記述にはさらに続きがある。1763年まで教授職に就いていたズルツァーだったが、アカデミーの財政スキャンダルと同じ1765年に、今度は、ザックの後任として、ヨアヒムスタール・ギムナジウムの監督官(Visitor)に推薦される。³⁴ こうしてズルツァーは、1766年から1773年まで³⁵この職権においてギムナジウムの改革に取り組むことになる。このことは多大な仕事と限りない不快感をもたらしたが、最終的にはこの国に少なからず貢献できたと自負できる結果を残せた、とズルツァー本人は語っている(L49)。³⁶ 後に学校長となったマイエロッター(1742-1800)の伝記によると、ギムナジウムの学校長は、1730年から1768年頃までハイニウスが、1769年頃から1771年までシュトツシュが務めた。³⁷ シュトツシュが辞任したあとは、ズルツァーの意図で、後述の教授会構成員が交代で学校長職を司った。³⁸ 従って、ズルツァーが監督官だったのは、シュトツシュが学校長の時期にその前後それぞれ数年を加えた期間ということになる。ズルツァーによる変革に最も不満をもっていたとされるのが、このシュトツシュである。³⁹

ズルツァーの改革は多方面に及ぶが、組織運営の面では、新しい規則の制定が挙げられる。1767年に、フリードリッヒ2世の裁可を受けて、『王立ヨアヒムスタール・ギムナジウムの改正された条例と規則』が印刷され、それによって根本的な変革がもたらされた。学校長が行使してきた独裁的な権力は制限され、教授会が設置された。教授会は毎週水曜に招集され、四半期に一度総会を開くとされた。新しい教授の任命もこの教授会で決定される。また、全教員が教室で遵守すべき方法も指示されることになった。⁴⁰ 合理的で洗練された教授法の導入はズルツァーの功績の1つで、プルンは、「彼とともにギムナジウムの新しい時代が始まった」と書いている。⁴¹ 新しい学校は7学年で構成された。上の4学年が本来のギムナジウムで、下の3学年ではギムナジウムに入る準備をする。下級学年では、注意力と悟性を鋭敏にするために、ドイツ語で書かれた地理・歴史・道徳の著作から子供の興味を引く文章を選び、それを読んで解説するということがなされた。このためにズルツァーは、『注意力と思考力を呼び覚ますための予備練習—ヨアヒムスタール・ギムナジウムの学級用』⁴² (1768)を編んでいる。この書は後にマイエロッターの監修でさらに大きなものとなり、19世紀まで長く使われた。⁴³ また、上級学年では、最良の古典作家の文章を読んで解説するということが行われた。ある時間は言葉の面に、別の時間は内容や精神や著者の思考法という面に力点を置いて読み、解説がなされた。⁴⁴ これらは改革の一部だが、『子供たちの教育と指導についての幾つかの理性的考察の試み』というかつての教育論、さらには監督官になる直前に書いた『古代人の古典的著作を青少年とともに読む最善の方法についての考察』⁴⁵ (1765)の精神が生かされ、その理論が実践に移されていると言えるだろう。その他、ズルツァーは、節度のない生徒を、幾つかの部屋の壁を打ち抜いた長い通路のような空間に住まわせて、一望監視しやすいようにする手段も試みたが、期待に見合う効果がなく、この開放的な空間はマイエロッターの時代に再び壁で塞がれた。⁴⁶

こうしたズルツァーの改革には抵抗も見られた。古い教員をまったく新しい教授法に慣れさ

せることは、当初困難を伴ったようである。しかし、そうした困難は新たな教員を加えることで緩和された。⁴⁷ シュトツシュの教授職は神学と雄弁術とに分けて補充され、雄弁術の教授にはズルツァーが注視していたマイエロッターを引き入れた。⁴⁸

ニコライは、ズルツァーの自伝に付した註のなかで、この改革の評価を行っている。ニコライは、様々な悪習がなくなったことは否定できないし、ズルツァーが優れた本質的な改革を構想したことも否定できないとした上で、うまく実現する手段を考える努力が足りなかったと述べている (L51)。⁴⁹ ヴァン・デル・ザンデは、こうしたニコライの評価はズルツァーの健康状態や教授たちから受けた抵抗を考慮に入れていない、としている。⁵⁰ いずれにしても、ニコライの言うように、ズルツァーの改革があっても、ヨアヒムスタール・ギムナジウムの状況はあまりよくなかったようで、マイエロッターの伝記にもその点についての記述が見られる。

「シュトツシュ博士が退任してからマイエロッターが学校長に任命されるまでのギムナジウムの内情をここで手短かに、真実に従って叙述する必要があると思われる。この時期のギムナジウムの歴史を『アナーキーの時代』と呼ぶことは正当だろう。・・・ギムナジウムの生徒たちの街での評判は最悪だった。親や後見人は、学校に信頼を寄せなくなりつつあった。生徒数が著しく減少したのは、そのことの直接的な帰結だった。／学校当局はしばらく前から、アナーキーな状態を終わらせることが必要だと見ていた。・・・しかし、このことはすぐには実現できなかった。・・・だが、事態がますます切迫してきて、ようやく国務大臣であるフォン・ツェドリッツは、ギムナジウムがますます沈み行くとしたら、これ以上ためらってはられない、と考えた。」⁵¹

こうして 1775 年に、教授陣のなかで最年少のマイエロッターが学校長に就任する。⁵² ニコライの描く図式の通り⁵³、ズルツァーの理念を最終的にマイエロッターが実現したと見るかどうかは別として、状況の現実的な改善にはマイエロッターの本格的な登場を待たなければならなかったようである。

ズルツァーの教育機関との関わりは、このギムナジウムに限らない。妻を亡くしたあとベルリンを離れていたズルツァーを、国王フリードリッヒ 2 世が新たな教育施設の計画があるとして呼び戻したことは先に述べた。⁵⁴

「1765 年によりやく新しい王立貴族学院の設立が実現した。まだすべての教授が揃っていただけではなかったが。それによってこの年、私は新たな人生行路を歩み始めた。」 (L43) この学校の建物は、ヨアヒムスタール・ギムナジウムのすぐ近く、王宮の川向かいに建設された。⁵⁵ こうしてギムナジウムの数学教授だったズルツァーは、貴族学院の哲学教授となる。

この貴族学院での最後は、病気のために国王に辞職を申し出ることになる。⁵⁶ その前年、72 年 12 月 1 日のポドマー宛の書簡は、依然として医師と薬の下に置かれている健康状態や、ベルリンにいる娘が出産して孫ができた近況などについて知らせているが、末尾は次のような文章で締められていた。

「青少年の真の初等教育について私は、ひょっとしたら、バゼドウと同じくらい考えてきたかも知れません。書いた量は、私の方が少ないでしょうが。私の願いは、私の経歴を閉

じるのに、あるいはむしろ完成するのに、・・青少年のための学校の設立を任されることで
す。」⁵⁷

実はズルツァーは、71年にクールラントの公爵からギムナジウム設立のために、現在はラトヴィアの都市となっているミタウに招かれていた。しかしズルツァーは詳細な構想⁵⁸を送っただけで、招聘自体は断っている。その理由としては、思わしくない健康状態やベルリンでの地位に満足していたことが考えられる。⁵⁹ またズルツァーは、プロイセンのギムナジウムの監督も行っており、その再建に協力していた。

「1770年ズルツァーは、とりわけ国王が気にかけていたと思われるプロイセンの学校改革に、改めてザック氏、シュパルディング氏とともに用いられた。彼は、クロースターベルゲン、シュタールガルト、シュテティーンへと旅立った。」(B95)

もっともブランケンブルクは、プロイセンやクールラントで必要とされたこうした面でのズルツァーの才能を認めながらも、哲学的教育学者であるなら、その種の仕事を選ぶべきではなかったとも述べている (B93)。

4 自然に彩られた居住空間

アカデミーの会員となる1750年にズルツァーは、クロップシュトック(1724-1803)を伴ってスイスに赴いている。この旅行から再びベルリンに戻ったあとは、自伝の記述からも窺えるように、ギムナジウムで辛苦を味わいながらも、幸福な家庭生活を送り、研究と実践と社交とに多忙な10年を過ごすことになる。ベルリンに戻ったズルツァーには、フリードリッヒ2世から土地が与えられた。ヒルツェルによると、妻の持参金が相当の額だったので、それがきっかけとなって、友人のペグリン(1714-89)の例に倣い、家を建てるための土地を王に請願したとのことである(Ha142)。1751年9月のポドマー宛書簡には、次のような文章が見られる。

「いま私が考えるのは建築のことばかりです。国王が街の真ん中に一区画の素晴らしい土地を贈ってくれました。そこに私は家を建てるつもりです。その際、エピクロスの庭を再現するつもりです。そして、2つの川に挟まれた、王宮からは石を数回投げるほどしか離れていない街の真ん中に、農場を持ちます。この仕事がいま、他のことのための注意力をすべて奪い取っています。」⁶⁰

ミュラーが付した註によれば、この家は、船で運ばれた荷物を保管したバックホーフ(Neuer Packhof)という建物の背後にあって、ズルツァーの死後は国務大臣のフォン・デア・ホルスト氏が住んだということである。⁶¹ この場所は、シュプレー川に囲まれて現在は博物館島となっているところで、バックホーフは今のナショナルギャラリー(Alte Nationalgalerie)の場所にあった。従って、その背後というズルツァーの住まいは、対岸のモンビジュー宮殿の側から見て、その右手にあったと思われる。⁶²

翌52年3月のポドマー宛書簡にも、住まいとなる土地の情景描写が見られる。

「私は今、ベルリンの真ん中の小さな農地で、来年にはそこに住めるような状態に今年もっていけるよう、全力で働いています。・私はずべての側を水と木々で囲まれています。白鳥が群れをなして私の庭にやって来ます。そこから私は、船を出すことができます。人に見られずに街の外に行けるのです。庭の片側に沿って、とても美しい公の散歩道の1つがあります。・3つの王家の宮殿が視界のなかにあります。」⁶³

ヒルツェルはこの手紙を引いたあとに、建物と庭の造り方は彼の趣味にとって名誉となるものであったが、可能な限り儉約しながら壮麗な美を追求して、大かがりな仕事だったので、学者としての仕事が犠牲になったと述べている (Ha143)。ズルツァー自身も研究に集中できないこの時期の状況を自伝に書き留めているが、そこには、生活と学究をめぐる思想性の一端も垣間見れる。

「それほど単純でない私の気性について述べたことをここで繰り返さなければならない。・こうした好ましい状況ですっかり研究に専念する代わりに、何かを整えたり仕上げたりしなければならぬ生活や実務を楽しむ私の傾向が、やはりもたげてきた。妻を喜ばせることも必要だった。それで気晴らしや小旅行や社交ということになった。家を建て、庭を造り、そこに心ゆくまで植物を植えた。このことが真剣で持続的な研究から私を遠ざけた。／しかしながら、すべてをよく考えれば、ひょっとしたらこれが最善の生き方ではないだろうか。つまり、仕事や持続的な研究にも、生活の快樂を味わうことにも完全には浸らずに、自制ばかりせず、両者の間で自己を分かちつのである。・だから、私は最期の時に近づいているが、上述のようなこれまで続けてきた私の生き方を後悔する謂われはない。私はあらゆる種類の人生の愉しみを味わってきたし、他方学問でも全く無為ではないところを見せてきた。」 (L31f.)

ズルツァーが環境を満喫したシュプレー川沿いの生活だったが、この家は妻が亡くなったあと売却されることになる。ヘリングは次のように記している。

「この土地は 1762 年、ズルツァーが不在の間にボルケ伯爵に売られたが、家を建てた者はそのことを知らなかったようである。ズルツァーは、買い手がこの家を望んだのであれば、その人のために自分が建ててあげたそういう人の手に渡ったのだろうと考えて、自分を慰めることにした。その後、アカデミーの俸給付きの地位とともに、ズルツァーがベルリンに留まることが決まった時、家と庭を望む気持ちが再び彼のなかで大きくなった。その願望は、ティアガルテンに農場付きの快適な別荘を建てることで満たされた。老境の日々、彼はここに隠れ家を見出そうとした。実務的な活動への昔からの愛着が再び蘇ってきて、骨の折れる精神労働のあとは、網を編んで疲れを癒した。彼の小農場を取り囲んで水が流れ、魚をとる機会を与えていた。」⁶⁴

自伝の記述に従えば、最終的に好条件で家を売却したのは 1764 年である (L37)。その後は貴族学院の教授としてその裏側の建物に住んだが、夏は城壁の少し外にある別荘で過ごした。

「この年 [1764 年] のうちに私は、国王からある場所をいただいた。それは、ベルリンから少し離れた快適で静かな地域に私が探し出した場所で、そこに庭と田舎風の住まいをつ

くった。それ以来、私はそこで非常に快適に夏を過ごしている。」(L43)

この別荘の位置をヒルツェルは、「ベルリンとシャルロテンブルクの間の快適な場所で、王のティアガルテンの対岸に当たるシュプレー川沿い、モアピーターラントにあった」(Hb102f.)と記している。「モアピーターラント」または「モアピート」と呼ばれるのは、大まかに言ってシュプレー川を挟んでベルビューの対岸に当たる地区で、ユグノーが移り住み、ズルツァーが生まれる少し前にフランス人コロニーがつくられた。⁶⁵ メンデルスゾーンがツィーママンに宛てた1772年の手紙にも、いまティアガルテンのベルンハルトの館に滞在しているが、それは、「シュプレー河畔で、モアピーターラントのズルツァーの庭園の向かい側にある」と記されている。⁶⁶ ヴェントラントは、1801年の地図に「ズルツァー教授の庭園」と記載されていることから、その場所をさらに厳密に「シュトロームシュトラッセの西側」と特定している。⁶⁷

ズルツァーの別荘はシュプレー川に面しているので、船で行き来ができた。ハンブルクやシュテティーンを經由してブランデンブルクなどの地方に向かう船が行き交い、ズルツァーはそれを毎日部屋から眺めていたようである。また、背後には果てしない森林が広がっていて、徒歩や馬で好きなだけ散策ができた。土壌は沼地だったが、どんな植え付けにも不便なく利用可能であった。自分の趣味に従って建てた華美ではない館や庭園の他に、林苑や農場を備えており、農場には水路を掘って水を流したのだが、その水路がシュプレー川の魚でいっぱいになった(Hb103)。⁶⁸ 1768年にボドマーに宛てた書簡のなかで、ズルツァーはこの頃の心持ちを語っている。

「政治や文学が目の前に差し出す対象というのは、もうすでに何度も評価したり非難したりしたものです。時々私は、もはや何物にも食欲をそそられなくなった美食家のような具合になります。こういう状態になると、木々や花や鶏のところに逃避するのです。まるで世界には思索する人間が関わることをできるものが他に何も無いかのように、これらとは一日中でも戯れていられます。そうすると私には、病気の木を切り揃えたり移し替えたりすることで死から救うことの方が、アカデミーの研究報告をつくることよりも重要な仕事になるのです。」(Hb127f.)

ヴァン・デル・ザンデは、ズルツァーの美学事典『芸術についての一般理論』の「遠近法(Perspektiv)」の項目に見られる銅版画⁶⁹が、まさにこのモアピートの別荘を描いたものであるとしている。⁷⁰

因みに、モアピートに自らの庭園を造るのと近い時期に、ズルツァーはベルリンのかつての植物園(Botanischer Garten)を再建する仕事にも携わっている。いまダーレムにある植物園の前身に当たるものは、シェーネベルクの現在クライスト公園となっている場所にあった。植物園は、七年戦争でベルリンを一時占拠したロシア軍の宿营地とされたために、生け垣や温室の一部やドアなどが薪として燃やされ、花壇や温室も荒らされた。その後、アカデミーの財政問題の委員会が植物園の再建計画を託したのがズルツァーであった。⁷¹ そうして、1766年から71年にかけて園に大規模な壁が築かれた。ズルツァーは植物園の新しい区画案を作り、植物や種子をロンドンやライデンから調達した。⁷²

『学問論』では、芸術 (Schönekünste) を建築術 (Baukunst)、絵画・彫刻 (Maler- und Bildhauerkunst)、舞踊 (Tanzkunst)、音楽 (Musik)、弁論 (Redekunst)、詩 (Dichtkunst) という風に分類していたズルツァーだが (§ 74, W58)、『芸術について的一般理論』では、造園術 (Gartenkunst) が芸術のなかに地位を占める権利は建築術と同等である、と述べられている。⁷³ 庭園設計の基本となる理念を自然の模倣という観点から説明したそれに続く文章は、ズルツァーの経験の反映を推察させる。

「自然は、人間の居住空間全般を非常に美しく飾り立ててくれるし、様々なものが非常に快く変化して私たちの心に作用することで、その居住空間を豊かにしてくれる。そのため、人間が特別な居住空間を整備する場合に、自然を模倣して、人生の大部分を過ごさなければならぬ区画をできるだけ美しくするのは、とても理性的なことである。それに向けて人間の手伝いをするのが造園術である。」⁷⁴

5 社交と芸術論

モアビートの別荘に精神を癒す避難場所を見出したズルツァーであったが、しかしまた、社交性もズルツァーの多面性を構成する要素であった。ブランケンブルクは、「彼の社交性の資質は、ベルリンにおいて完全な、そして最高の栄養を見出した」(B50)、と書いている。

「ズルツァー氏は、あらゆる立場、あらゆる階層に友人知人を得た。およそどんな職業学者の間にあっても、よき付き合いの調子、教養ある社交的な生活の調子を保っていて、然るべき判断者の意見によれば、会話を活発にする才能を完全に有していたということである。ヒルツェル氏が我々に叙述するところによれば、ズルツァー氏は、人生の早い時期、常に快活で、他の人には真似のできない語りの術をもっていた。彼は亡くなったプロイセンの皇太子から特別な信頼を受けていた。・・ズルツァー氏は、知識を拡大するためにも、親交を利用していったように思われる。ザック氏、オイラー、ラムラー、クライストとの交際は、精神を発展させて完成させるのに大いに役立ったに違いなく、それには特別な言及を要しない。」(B51f.)

中でも「月曜クラブ」⁷⁵は、こうしたズルツァーの社交的な一面を特に象徴するものと言えるだろう。この会の設立者は、スイス人神学者で、ズルツァーの4歳年下になるシュルテス (1724-1804) である。1749年8月からベルリンに滞在していたシュルテスは、同年、ズルツァーやラムラー (1725-98) とともに、ベルリンで最初と言える知的サークルを作った。シュルテスはチューリッヒでボドマーの文学サークル ("Wachsende Gesellschaft") に属しており、そのことも設立の動機となっているようである。会の目的は、縛られない洗練された談論やくつろいだ親睦といったことであった。⁷⁶ ズルツァーがグライムに当てた手紙には、グライムが容易に推測できる8名が毎週木曜日の夜に集まって、ほとんど笑ってばかりいる、と書かれている。⁷⁷

かなり後年のことになるが、ゲッキング (1748-1828) が書いたフリードリッヒ・ニコライの

伝記（1820年出版）のなかに、設立から「70年」⁷⁸経ったこの会についての記述がある。設立以後の物故会員のうち世間に知られた者の名が入会順に挙げられていて、ズルツァー（1720-79）、ラムラー（1725-98）、アグリコラ（1720-74）、レッシング（1729-81）、ニコライ（1733-1811）、アプト（1738-66）、ミュリウス（1722-54）、エンゲル（1741-1819）、ピースター（1749-1816）、ベルヌイ（1744-1807）、テラー（1734-1804）、クライン（1744-1810）、ゲーディケ（1754-1803）といった名前がそこに見受けられる。⁷⁹ また、ゲッキングは、1804年5月にシュルテスが亡くなって、代理ではなく完全な代表者（Senior）となったニコライの誕生日（1805年3月18日）にピースターが行ったスピーチを長々と採録しているが、その中には、ニコライによって読めるようになったシュルテスの日記から、クラブの創立年が1748年ではなく49年であることを知ったという下りもある。創立は1749年10月の木曜日（何日かは不明）で、創立時の会員は8名と言われている。⁸⁰ また、このスピーチに、「ベルリンのモーレンシュトラーセ」⁸¹という通りの名前が出てくるが、ここに月曜クラブの集まりに利用した高級料理店があった。

スピーチの前年にピースターは、自らが編集する『新ベルリン月報』の12月号に「ヨハン・ゲオルク・シュルテス」と題する、シュルテスの死を悼む文章を巻頭に載せている。⁸² そこに、亡くなる前にシュルテス自身が残した、月曜クラブの創立に関する文章が見られる。⁸³

「ボドマーの勧めで、私はすぐにズルツァー教授と親交を結んだ。ズルツァーとラムラーと私が、友人たちを毎週クラブに招待しようと考えついたのは、1749年10月のことだった。友人たちというのは、宮中顧問官のベルギウス氏、副学校長のズクロ氏、弁護士のクラウゼ氏、宮中画家のヘンベル氏、教授のランゲマック氏であった。提案は全員に歓迎された。全員一致で木曜の夜が自由なお喋りの日と定められ、いつも簡単な夕食を交えることとなった。こうしたクラブの構想は、会員の考え方や趣味が同じであることから、非常にうまく実現して、誰かが欠けるということは滅多になかった。話す対象や話し方という点では、完全な自由またはラプソディーが支配した。・・従って、最初の会員が生きていた間、あるいはベルリンに留まっていた間、このクラブが続いたということだけでなく、常に新たなものとなって19世紀にまで伝えられたということも、驚くには当たらない。」⁸⁴

しかしシュルテスは、創立から1年も経たないうちに、1750年7月にチューリッヒに戻る。ズルツァーは、それから1773年まで約23年間クラブの代表者を務めることになる。ズルツァーが代表の時期は、会にはまだ形式的な規定はなかったようである。⁸⁵ 「月曜クラブ」に関しては、資料的にはズルツァー以後のものが多いが、これだけ長く存続したクラブの場合、文献資料の多寡ということ自体が示唆しているように、初期の時代からの変質は多かれ少なかれ考慮に入れる必要があると思われる。⁸⁶

話を1750年の夏に戻すと、シュルテスがベルリンからスイスに帰る際には、ズルツァーとともに故国へと旅をした。その途上、マクデブルクでコイゼンホーフ嬢に求婚し、応諾の返事をもたらしている。

「社交的な人生の輝かしい頂点にあるのが、1750年夏のバッハマン邸である。ズルツァーはベルリンからここに来て、まさにヴィルヘルミーナの承諾を得たばかりだった。グライ

ムとクロップシュトックは・・マクデブルクに急いだ。そこに、ゲスナーの教師であったベルリンの画家ヘンペルが加わった。この館の古い馴染みであるザックも、もちろん欠けてはいなかった。ボドマーの真の使者であるシュルテスは、マクデブルクを通過して故郷に帰る道を選んでいた。」⁸⁷

クロップシュトックは、1748年に『救世主』の最初の3詩章を雑誌に発表して、大きな反響を巻き起こしていた。シュルテスとズルツァーは、クロップシュトックを伴ってスイスへ向かい、7月23日にチューリッヒに到着している。⁸⁸

「ボドマーはクロップシュトック氏の『救世主』に感激して、以前に批評性や詩情や才気ある文章を集めるなかで彼が英雄詩に薦めていた題材である洪水を、50歳の時に自ら彫琢し始めただけでなく、クロップシュトック氏をチューリッヒの自身の館に招きもした。そこに付き添ったのがズルツァー氏である。」(B54)

この後、ズルツァーとクロップシュトックはチューリッヒのボドマーの館で過ごしたが、ここではクロップシュトックは、ボドマーやズルツァーとはあまり調子が合わなかったようである。クロップシュトックは冬の間もチューリッヒに留まったため、ズルツァーは一人で帰路に就いている。⁸⁹ ベルリンに戻ったあとのズルツァーの様子をヘリングは、ボドマーとの関係を強調する独自の調子で、次のように描写している。

「ズルツァーにとっては、『救世主』の位置にその後ボドマーの『ノア』が導きの星としてやって来たわけだが、そのことで、1748年[原文のまま]にスイス人のシュルテスによって創立された月曜会に集まるベルリンの文学仲間の何人かと対立することにもなった。もともとこの会の創立者には、スイス的な方向は十分に念頭にあったのかも知れない。というのも、シュルテスはまさにボドマーの意向で活動していたからである。シュルテスが去ったあとズルツァーは、公式にチューリッヒから委任を受けて、その遺産を相続した。」⁹⁰

1750年に、ズルツァーとラムラーは、共同編集で『学識の国からの批判的報告 (Critische Nachrichten aus dem Reiche der Gelehrsamkeit)』という一般向けの新聞を出しているが、短い期間で挫折している (B52f.)。⁹¹ ブランケンブルクは2人の批評基準が一致していなかったのではないかと推測しているが (B53)、「スイスの布教紙」とも評されるほど、ズルツァーが時折高揚した調子でスイス人を称賛するのに対し、ラムラーがそれを抑えようとしたことが挫折の原因とも言われた。⁹² ノールトンによると、この新聞は週刊で、8ページの構成であった。書評やニュースだけでなく、オリジナルな寄稿、さらには独・英・仏の現代文学の抜粋を掲載したが、編集の体制が変わることで内容も次第に変質していった。ズルツァーは編集をラムラーに譲り渡し、翌年はミュリウスが引き継いだ。刊行は年末まで続かなかった。⁹³ この新聞の一件をヘリングは、自らの構図に従って、「ベルリンはチューリッヒやライプツィヒから独立を保ちたかったのだ」と結論付けているが⁹⁴、しかし、ベルリンにとってのズルツァーではなく、ズルツァーにとってのベルリンという意味では、そしてより広範な視点では、ブランケンブルクが、ベルリンに来たばかりの頃を指して、「美的な芸術や学問に大いなる素質をもっていたズルツァーにとって、ベルリンは当時、どんな分野の知識でも獲得できる最も好ましい場所

の1つであった」(B49)、と述べているこの街との一般的な好ましい関係を、趣味をめぐるこの個別の事象が否定するものではないと思われる。⁹⁵

ベルリン1年目の1747年12月にランゲに宛てた書簡には、こう書かれていた。

「おっしゃるように、当地では、円や三角が私の主要な仕事となるでしょうが、だからと言って、私が美的な学問を完全に部屋から追い払うとお考えいただく必要はありません。確かに今は、部屋の一角を占めているだけですが、しばしばこの一角が私の部屋の中心的な場所になります。」⁹⁶

この美的な学問をめぐる仕事は、最終的には美学事典という形で結実することになる。ズルツァーの主著と見なされているこの事典が構想されたきっかけは、ヒルツェルによると、1756年に入手したラ・コンブの『美術事典』に感激し、それに似た事典を作ろうと考えたことだった。ズルツァーは時間のある時にそのフランス語の事典を訳し、その各項目の説明を自分のやり方で推敲したという(Ha219)。以下も、ヒルツェルの記述である。

「学が不十分な者、学がない者、種々の仕事のために根本的な学識の継続ができなくなっている者に豊かな学識を伝えるこうしたやり方を、百科事典(Dictionnaire Encyclopedique)が広く人気のあるものにしていて、それによって我々の哲学者[ズルツァー]は、芸術におけるよき趣味をより一般的なものとするのに、こうした手段が非常に有用かも知れないと気付く機会を得た。徹底した思索家が芸術の批評を扱い、それに関係するすべてのことを正しい原則から導き、その上で、体系的に考え抜かれた自らの論をアルファベット順に分散させたら、芸術家も愛好家も、芸術の対象について判明な概念をもつよう必要性や好奇心に刺激された場合に、判明な概念が最高の原則から導かれているのを目にすることになるだろう。趣味の一般原則をあらゆる種類の芸術や美的学問に適用することは、こうした事柄への一般的な注意力を活発にすることだろう。絵画や彫刻や音楽の愛好家が、詩や他のすべての芸術も、自分の分野で知っているのと同じ原則に従っているのを見ると、その人の特殊な趣味は普遍的なものとなるだろう。そのようにして、知らない間に芸術に対する真の趣味が芸術家や愛好家の間に広がり、知らない間に国民性の一般的な洗練が起こるだろう。このような形で、『芸術についての一般理論』の最初の萌芽が彼の心に浮かんだのであった。」(Ha219f.)

辞書形式にしたのは、忍耐力という点で体系的に記述された一般理論から学ぶことが困難な愛好家のためであって、書名と形式の間に我々が感じる齟齬も、実際に一般理論を先に完成させたかどうかは別として、こうした意図の下に一般理論を百科全書の装いで分散させる構想だったと考えれば、理解できる。⁹⁷ それに関してブランケンブルクは、現実にズルツァーの残した事典がどれほど愛好家向けかという点を問い、必ずしも愛好家だけに向けたものでなく、常に本来の識者を念頭に置いていたことがその後の遅延の原因だと推考している(B72f.)。ヒルツェルの伝えるところでは、「最初は、片手間の時間を振り向ければ、数年で完成できる」(Ha220f.)と考えていたようであるが、この著作が予告されたのは1760年で、実際に第1部が出版されたのは1771年であった(B75f.)。また、ブランケンブルクは、体系的な理論と百科事典の形式と

の間には、体系から離れることから得られる後者の自由さや快適さという点で本質的な違いがあるとする問題提起を、批評家の声を引きながら行っているが (B73f.)、これは重要な指摘だと思われる。1772 年の小著『起源、真の性質、最良の利用という点から見た芸術』が、『一般理論』が依拠している原則を示すものと言われるが (B97)、そうした指摘にも『一般理論』には原則論がないという見方が背景にある。

それとは別にブランケンブルクが指摘していたのは、ズルツァーの文学的な嗜好である。ドイツ語文学の例の大半がポドマーから引かれていたり、近代の詩人、ドイツ語の詩人の例があって然るべき箇所でも古代の詩人からの例が見られたりする (B114)。このことにも、ポドマーとの親密な関係を初めとして、様々な外的事情が関わっていると思われる。1762 年に祖国に戻った際に、「朝 5 時からお昼まで事典の仕事を実際にして、友人たちの前で仕上げた原稿を読み、A から G までの部分を完成した」(B87) という成立の経緯も影響しているかも知れない。⁹⁸ ポドマーはズルツァーに改作された『ノア』を持たせていて、それをズルツァーは 1765 年にベルリンで出版した (B87)。ズルツァーはベルリンに戻ってからも、以前よりも集中して美学事典に取り組むようになり、「その結果、従来よりもはるかに孤独な生活を送るようになった」(Hb71)、とヒルツェルは伝えている。ズルツァーは『一般理論』が完成するまでは生きていたが、第 2 部が 1774 年に出版されて、それが成就した (B120)。⁹⁹

ズルツァーの晩年は病気との闘いだった。死に至る病となった肺の病気を患うきっかけは、1772 年に、農場で風邪を引いたのをなおざりにしたためだとも、熱があったのにスウェーデン女王の夕食の招待に応じたためだとも言われている (B117f.)。¹⁰⁰ ズルツァーは、引退後はモアビートの館で 1 年の大半を過ごした。¹⁰¹ 1777 年の大晦日にメーリアンとともに国王に謁した後は、次第に部屋に籠もるようになり、最後にはベッドで内面と向き合うだけとなった (B129f.)。そして、1779 年 2 月 25 日午後 5 時に、故国から離れたベルリンで息を引き取っている (B134)。

本稿では、ベルリンを舞台としたズルツァーの活動の多面性を描いてきた。思想と実践は緊密にあるいは緩やかに結び付いていて、相互に底流となりうる関係にあると思われる。思想の内実という点でも、ズルツァーは、合理主義と経験主義の間を、そして初期の啓蒙主義と後期の啓蒙主義の間を行き来する人物として表象されてきた。¹⁰² ズルツァーの思考は、客観的な形で表れた複数の要素の配置を通じて浮かび上がる、そのような構造のものではないだろうか。ズルツァーの活動の振幅について記した本稿の記述の先にある課題は、ズルツァーの思想的な多面性を描くことであり、その諸要素の配置が 18 世紀の思想史的風景の変化のなかでどのような位置を占めているかを見定めることである。

省略記号 (本文中での引用の際は、記号とページ数によって略記する)

B Friedrich von Blanckenburg: Einige Nachrichten von dem Leben und den Schriften des Herrn Johann George Sulzer.
In: Johann George Sulzers vermischte Schriften. Eine Fortsetzung der vermischten philosophischen Nachrichten

derselben. Zweyter Theil. Leipzig 1781

Ha [Hans Kaspar Hirzel:] Hirzel an Gleim über Sulzer. Erste Abtheilung. 1779

Hb [Hans Kaspar Hirzel:] Hirzel an Gleim über Sulzer. Zweyte Abtheilung. 1779

L Johann Georg Sulzer's Lebensbeschreibung, von ihm selbst aufgefaßt. 1809

W Johann Georg Sulzer: Kurzer Begriff aller Wissenschaften und andern Theile der Gelehrsamkeit, worin jeder nach seinem Inhalt, Nutzen und Vollkommenheit kürzlich beschrieben wird. Vierte ganz veränderte und sehr vermehrte Auflage. 1774

- ¹ Adolf Harnack: Geschichte der Königlichen Preussischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin. 1900 Bd. I .1, S. 327; 『18世紀ベルリンにおけるスイス人』(1996)という論集に収められた論考のなかでブッシュマンは、こうした状況について、「プロテスタントのスイスの全体は、プロイセンやブランデンブルク以上にプロイセン的である」というズルツァーの言葉を鏡像的に振って、「ブランデンブルクやプロイセンの幾つかのアカデミックなサークルは、体質という意味でスイス以上にスイス的である」と述べた。Vgl. Cornelia Buschmann: Schweizer in den Diskussionen über die Preisaufgaben der Berliner Akademie im 18. Jahrhundert. In: Martin Fontius und Helmut Holzhey (Hg.): Schweizer im Berlin des 18. Jahrhunderts. 1996, S.306
- ² Vgl. Robert Hering: "Johann Georg Sulzer" In: Jahrbuch des freien deutschen Hochschiffs. 1928, S.265-326, hier S.266
- ³ Vgl. Hering, a.a.O. S.270 「ボドマーとプライティンガーは、チューリッヒでズルツァーの先生だった。ライプニッツ＝ヴォルフ哲学や、イギリス文学の知識は、彼らが伝えた可能性がある。それ以上のことは、チューリッヒの先生たちの影響をあまり高く見積もりすぎてはならない。というのも、両者を最も突き動かしていたもの、いわゆるスイス派とゴットシェートの論争において問題となっていたものについて、スイス時代のズルツァーは、予感以上のものはほとんどもっていなかったと思われるからである。」
- ⁴ Vgl. L15f. 「私が寄宿していた説教師は、ゲスナー教授の父親だった。教授は当時まだ父親のところに住まわれていた。しかし私がそこにいた最初の年は、この本物の学者をお見かけすることはあまりなかった。非常にしばしば病気になられ、それ以上に地方で回復を図られるためご不在のことが多かった。しかし、私の学究生活の2年目に、私はより近しく教授と知り合う幸福に恵まれた。ゲスナー教授はすでに当時素晴らしい図書室を有しておられた。その志向はほぼ全ての学問に広がり、物理学、博物学、数学、哲学に徹底した知識をお持ちであった。この品格ある方と近しく知り合いになれるとすぐに、私に学問への強い感情が呼び覚まされてきた。私は幾何学、物理学、博物学に真剣に取り組み始めた。私がそうするのにゲスナーは正確な指示を与えてくれた。」
- ⁵ Vgl. L13 「幸運だったのは、私がいた寄宿先に同時に何人かの熱心な学生がいたことだった。彼らは文学や学問においてすでに幾らか歩んでいた。彼らの話や本から私は、人が文学や学問と呼ぶものについての最初の概念を手に入れた。両者は快いこと、重要なことに関わっているのを見て取り、これが私に初めての研究意欲を与えた。私が手に取り、むさぼり読んだの最初の本の一つが、ヴォルフの『ドイツ語形而上学』であった。」
- ⁶ この自伝に基づいていると思われる同様の記述が以下の事典に見られる。Walther Killy (Hg.): Literatur-Lexikon. Autoren und Werke deutscher Sprache. 1991, Bd.11, S.287; Johann Georg Meusel: Lexikon der vom Jahr 1750 bis 1800 verstorbenen deutschen Schriftsteller. 1968, Bd. 13, S.554; Allgemeine Deutsche Biographie. Hrsg. von der Historischen Commission bei der Königlichen Akademie der Wissenschaften. 1912, Bd. 37, S.145 それに対して、ブランケンブルクは1744年にマクデブルクに向かったと書いている。誤記であろうか。Vgl. B24
- ⁷ Vgl. L24 「それで私は1745年の年頭にベルリンに旅行した。しかし着いてみると、その職はすでに人に与えられてしまったと聞いた。しかし私は彼の地でオイラー氏と知り合い、オイラー氏を通じて、後にアカデミー総裁となるモーペルテュイ氏と知り合った。短くはあったが、この街に住みたいという私の欲求をさらにとても強いものにした滞在を終え、あなたが当地で奉職する機会に十分注意したいという知人たちの約束とともに、私は再びマクデブルクに戻った。」(L24); ズルツァーは、46年にもベルリン旅行を行っていると思われる。Vgl. B41
- ⁸ アカデミーの数学部門の長であるオイラーは、バーゼル生まれのスイス人であった。
- ⁹ フリードリッヒ・ニコライは、『王宮所在都市ベルリンおよびポツダムの描写』(1769)のなかで、ウンター・デン・リンデンにある王室の厩についてこう書いている。「王室の厩は大きな建物で、先述の宮殿の向かい側にある。正面ファサードは今のよう2階建てで、上の階は1695年に新設の諸芸術のアカデミーに与えられた。1743年に不幸な火災がこのファサードを呑み込み、同時にすべての彫像、絵画、工芸模型が駄目になった。その後このファサードは、国王の命令で、王室建築監督のパウマンによって新しく建てられた。(シュタルシュトラセ側の)上階の広めの半分が諸学問の王立アカデミーに与えられ、残りの部分の使用が画家アカデミーに許された。」 Friedrich Nicolai: Beschreibung der Königlichen Residenzstädte Berlin und Potsdam und aller daselbst befindlicher Merkwürdigkeiten. 1769 (= Friedrich Nicolai: Gesammelte Werke, hg. v.

- Bernhard Fabian und Marie-Luise Spieckermann, Bd.2 1988), S.108f.
- ¹⁰ Johan van der Zande: Johann Georg Sulzer. Spaziergänge im Berliner Tuskulum. In: Ursula Goldenbaum u.a. (Hg.): Berliner Aufklärung. Kulturwissenschaftliche Studien Bd.1 1999, S.51
- ¹¹ Johann Georg Sulzer: Vermischte philosophische Schriften. Aus den Jahrbüchern der Akademie der Wissenschaften zu Berlin gesammelt. 1773
- ¹² Vgl. B61 「ズルツァー氏がヴォルフの弟子であり熱心な支持者であることは、彼のあらゆる哲学的著述に明らかな証拠を見出す。しかしやはり彼は、この偉大な哲学者の盲目的な支持者というわけではまったくない。ひょっとしたら、彼の哲学的な性質は、ヴォルフ派の折衷主義者という名称で呼ぶことができるかも知れない。／彼がヴォルフ流の方法、一般的に言えば総合的な方法を好きになれなかったということは、哲学や数学の諸学と並んで、他のあらゆるタイプの人知を愛好していた者にとっては、きわめて自然なことであった。実際いま、哲学者たちをこうした方法に縛るものはもう何もない。・・ズルツァー氏は、ヴォルフや他のドイツの哲学者の著作に埋もれている宝がより公益に資するものになればという、どこかで述べた彼の願いを自らが率先して部分的に実現しようとしたように見える。」
- ¹³ Hans Erich Bödeker: Konzept und Klassifikation der Wissenschaften bei Johann Georg Sulzer (1720-1779). In: Martin Fontius und Helmut Holzhey (Hg.): Schweizer im Berlin des 18. Jahrhunderts. 1996, S.335
- ¹⁴ Wolfgang Ribbe (Hg.): Geschichte Berlins. Bd.1 2002, S.398 Vgl. B82
- ¹⁵ Vgl. L36f. 再びベルリンに戻って以後も、王の計画の詳細が明らかにならないので、ズルツァーは残りの人生について熟考し、1764年に王に手紙を書いて、故国に戻る決意を実行に移す許しを求めている。王からは翻意を促す返信が来たので、先の願いを再度繰り返すと、今度は使者が遣わされて、ズルツァーに急ぎポツダムへ来るよう求めた。この機会の人を介した遣り取りのなかで王は、若者の教育のためのアカデミーを設立したいこと、ズルツァーにはそこで哲学を教えてもらいたいことを明らかにし、俸給に関する約束もした。それによってズルツァーは、改めて、そして終生ベルリンに留まることとなった。
- ¹⁶ Emil A. Fellmann: "Leonhard Euler" 1995, S.96
- ¹⁷ Harnack, a.a.O. S.363
- ¹⁸ ibid.
- ¹⁹ Vgl. L46f. 自伝の記述によると、国王に対する提案でまともななかった委員たちが三案併記の報告に署名しているところへ、王がその報告をすでに見たと推測するほかはない王の書状が届き、オイラーが委員会に知らせないまま王に書簡を送っていたことが発覚する。しかも委員に問いつめられてオイラーがテーブルの上に出した自身宛の王の返書は、「私は曲線を計ることはできないが、16が13より大きいくらいは分かる」というオイラーに対して辛辣な内容で、よりよく管理すればカレンダー事業は現在の13000ターラーではなく16000ターラーの収入が見込めるという報告書の文面を知った上で、オイラーの提案を拒否するものであった。オイラーはこのあともう一度王に書簡を送るが、見たところ非常に深刻な返事を受け取ったようで、それは誰にも見せなかったということである。
- ²⁰ van der Zande, a.a.O. S.51
- ²¹ Harnack, a.a.O. S.333
- ²² Ernst Cassirer: Die Philosophie der Aufklärung. In: Birgit Recki(Hg.): Gesammelte Werke. Hamburger Ausgabe. Bd.15 2003, S.89f. 「モーペルテュイのライプニッツに対する個人的な立場は、もちろん矛盾を免れていないが、彼の形而上学、自然哲学、認識論がライプニッツの根本思想と事実として関連していることは、誤解の余地がない。最小作用の原理を主張する場合も、連続性の原理を定立して根拠付ける場合も、空間と時間の現象性の理論においても、起源はライプニッツの根本思想にある。もっとも、これらの点でモーペルテュイは、ライプニッツへの直接的な接続を避けようとした。ライプニッツの基本学説を黙って習得しながら、体系そのものは、特にヴォルフやその弟子たちがその体系に与えた形のもの、批判し排除しようとし続けた。このはっきりしない曖昧な態度が、ケーニッヒとの論争において致命的となった。しかし、ケーニッヒが示唆したライプニッツへの依存は、モーペルテュイの表現による『最小作用の原理』よりも、彼の生物学理論に一層明確に表れている。」
- ²³ Harnack, a.a.O. S.333f.; Vgl. Fellmann, a.a.O. S.83 「モーペルテュイは傲慢で、大変虚栄心が強く、過度に傷つき易くもあり、また傷つけることもあった。職務上の権威を保つ場合や、誤った先取性を守る場合には、時として見境がなかった。そのことは、『最小作用の原理』をめぐる醜い争いとなったケーニッヒ事件(1751年)がとりわけ印象深い形で立証することとなった。」
- ²⁴ Wilhelm Körte (Hg.): Briefe der Schweizer Bodmer, Sulzer, Gessner. 1804, S.196f.
- ²⁵ van der Zande, a.a.O. S.52f.
- ²⁶ Vgl. Nicolai, a.a.O. S.23f. 「ブルクシュトラッセは、アルト・ケルンの境界に位置していて、シュプレー川に沿ってランゲ・ブリュッケの左右に広がっている。この通りの名は、向かいにある王宮ないしは城(ブルク)から来ている。シュプレー川沿いは、角石と鉄の手すり縁取られている。この通りには、・・王立貴族学院の裏側の建物(1765年にかつて庭園だった広場に建てられ始めた。今も建設は続いている)、ヨアヒムス

タール・ギムナジウムの裏側の建物・・・がある。この通りからランゲ・ブリュッケを渡って、王宮や古い大聖堂広場に行ける。・・・ハイリゲガイストシュトラッセは、ケーニヒスシュトラッセから聖霊病院まで続いている。ここには、・・・王立貴族学院の表側の建物（そこに教授たちの住まいがある）が建っている。王立ヨアヒムスタール・ギムナジウムは、ハイリゲガイストシュトラッセとブルクシュトラッセに面していて、非常に巨大な建築となっている。国王フリードリヒ1世がこの立派な建物を築かせ、1717年に完成した。・・・この建物の内部は広大である。川の側が本来の学校の建物である。そこに監督官やギムナジウムの生徒が住んでいる。表側の建物と、建物を分けている2つの中庭のところには、非常に快適な住まいがあって、ギムナジウムの教員が住んでいる。そこには学校の図書館もある。」また、添付のベルリン地図にもギムナジウムの位置が記載されている。

²⁷ Nicolai, a.a.O. S.245f.

²⁸ Johann Georg Sulzer: Versuch einiger vernünftigen Gedanken von der Auferziehung und Unterweisung der Kinder. 1745¹, 1748²

²⁹ Vgl. B34「増補には、そしておそらく改訂にも、友人たちが直接的あるいは間接的に関わった。チューリッヒの学校の長であったキュンツリ氏は、M・キンダーリーブという名前で、ズルツァー氏に反論するかのような装いで、チューリッヒにおいて教育に対して支配的な行き過ぎや偏見について補足を行った。枢密顧問官であるベルリンのザック氏は、若い人たちのための理性的行動の規則を、ズルツァー氏の著作の続きと見られる形で書き、ランゲ氏は見たところ注解を書いたようである。当時チューリッヒの教理教師だったヴァーザー氏は、手紙の形で、この著作に対するきわめて気難しい序文を書いた。」；vgl. Ha68f.

³⁰ Johann Georg Sulzers pädagogische Schriften, mit Einleitung und Anmerkungen von Willibald Klinke. 1922, S.41-173
クリンケの解説も参照のこと。Vgl. ibid. S.32

³¹ ibid. S.32

³² ibid. S.33

³³ フォルマイは、この頃からすでに気持ちがベルリンに向いていたのではないかと推測している。Vgl. Ha95;
Samuel Formey: Éloge de M. Sulzer. In: Nouveaux Mémoires de l'Académie Royale des Sciences et Belles-Lettres. 1779, S.51

³⁴ Vgl. L50, B91 新任の大臣であるフォン・ツェドリッツが完全な改革に乗り出した時、監督官のザックは当然のことながら最大の役割を果たさなければならなかったのだが、彼にその気がなく、辞任して、ズルツァーを国王に推薦するよう大臣を説得した。

³⁵ Friedrich Leopold Brunn: Versuch einer Lebensbeschreibung J. H. L. Meierotto's. 1802, S.152

³⁶ Vgl. L51f. 「改革は、確かに私の意図からすると完全ではないが、しかし大部分が実現できたし、新たな規則、新たな教授法、何人かの新たな教員が投入され、それによって忌まわしい逸脱行動がようやくなくなった。奇妙だったのは、私がそれによって古い教員のほぼ全員から反感を買ったことである。私は彼らの給料を増やし、仕事を減らし、若者の中の彼らの信用と権威を目に見えて引き上げたにもかかわらず。」

³⁷ Brunn, a.a.O. S.133, 136, 148, 149 ; ブルンによると、ハイニウスは1769年にギムナジウムの全ての職を解かれているが、ヴァン・デル・ザンデは、マイエロッターが1775年に87歳のハイニウスを辞めさせたとしている。Vgl. van der Zande, a.a.O. S.48

³⁸ Brunn, a.a.O. S.149f.

³⁹ ibid. S.149

⁴⁰ ibid. S.140f. ; Vgl. B91

⁴¹ Brunn, a.a.O. S.138

⁴² Johann Georg Sulzer: Vorübungen zur Erweckung der Aufmerksamkeit und des Nachdenkens, zum Gebrauch einiger Klassen des Joachimsthalischen Gymnasiums. 1768 ; 出版年について、ヒルツェルは1768年としている。モイゼルを初めとする幾つかの人物事典でも、1768年（8月）と記されている。ブランケンブルクの伝記（およびそれに基づいているのであろうヴァン・デル・ザンデ）は「1767年」としているが、ブランケンブルクの伝記に付された年代順の著作リストでは「1769年8月」と書かれている。Vgl. Hb106; Meusel, a.a.O. S.557; B92; van der Zande, a.a.O. S.49; "Chronologisches Verzeichnis der sämtlichen Schriften des Herrn Johann George Sulzers" In: Johann George Sulzers vermischte Schriften. Eine Fortsetzung der vermischten philosophischen Nachrichten derselben. Zweyter Theil. Leipzig 1781, unpag.

⁴³ Brunn, a.a.O. S.145 ; Vgl. van der Zande, a.a.O. S.49 ; ニコライもズルツァーの自伝に付した註のなかで、この小著について触れている。それによると、1771年にズルツァーは改訂新版を出している。また、1780年には、マイエロッターが3分冊にして、下級・中級・上級の学年で用いるようにした上に、教員用の第4分冊を付け加えている。Vgl. L52 ; モイゼルも参照のこと。Vgl. Meusel, a.a.O. S.557

⁴⁴ Brunn, a.a.O. S.144f.

⁴⁵ Johann Georg Sulzer: Gedanken über die beste Art die claßischen Schriften der Alten mit der Jugend zu lesen. 1765
In: Johann Georg Sulzers vermischte Schriften. Zweyter Theil 1781, S.215-237

- ⁴⁶ Brunn, a.a.O. S.170f. ヴァン・デル・ザンデは、フーコーによって有名になった円形刑務所を想起させると記している。Vgl. van der Zande, a.a.O. S.48
- ⁴⁷ Brunn, a.a.O. S.147
- ⁴⁸ ibid. S.150
- ⁴⁹ Vgl. L51f.「ズルツァーは、学校をすっかり作り替えたあと、困難に嫌気がさして、手を引いてしまった。・・・古い教員たちは彼の理念を理解することができなかつたし、ひょっとしたら一部には、それを望まなかつたということもあるかも知れない。新しい教員の C.H.ミュラーは・・・ズルツァーとは同郷で、ズルツァーがベルリンに呼び、不幸なことに全幅の信頼を置いた人物だったが、全くと言っていいほどほとんど役に立たなかつた。そして、彼の頭に血が上りやすい見当違いの面が、非常に多くのものを台無しにしてしまった。そのため、ズルツァーの素晴らしく考え抜かれた改革は、当初このギムナジウムに好ましい効果をもたらさなかつた。むしろ、とりわけズルツァーがもっと自由を与えようとしたこのギムナジウムに住んでいる生徒たちの間に、極端な規律の欠如が広まった。その後、優秀なマイエロットーがこの学校の学校長職を引き受け、ズルツァーの優れた考えを彼自身の考えと結び付けながら、学校を次第次第に模範的な状態にもっていった。」
- ⁵⁰ van der Zande, a.a.O. S.49f.
- ⁵¹ Brunn, a.a.O. S.154f. ; ヴァン・デル・ザンデは、ブルンの言葉を引用しながら、ハイニウスの学校長の時期は「アナーキーの時代」だったと書いているが、ブルン自身によれば、ブルンが「アナーキーの時代」とするこの時にはハイニウスはギムナジウムの全ての職から退いている。さらにヴァン・デル・ザンデは、ズルツァーが教授職にあった時期の混乱についての一文中で「独裁的な学校長」と書いているその学校長がハイニウスであることと繋ぎ合わせて、ブルンのこの文章をズルツァーが叙述した混乱を裏付ける証言として引いているが、ズルツァーが数学教授であったのは 63 年までで、ブルンの言う「アナーキーの時代」は 71 年以降なので、明らかに時期はずれている。Vgl. van der Zande, a.a.O. S.48
- ⁵² Johann Georg Meusel: Lexikon der vom Jahr 1750 bis 1800 verstorbenen deutschen Schriftsteller. 1967, Bd. 9, S.30
マイエロットーはこのギムナジウムの出身で、1772 年に雄弁術の教授となっていた。
- ⁵³ Vgl. Anm.49
- ⁵⁴ 王の引き留めについて、ブランケンブルクはこう書いている。「王は彼をベルリンに新しくできた貴族学院の教員とした。さらには、幾つかの学校機関をよりよく整備するために彼を活用しようとした。後者のことは、ひょっとしたらズルツァー氏が、ヨアヒムスタールの組織に不満だったことで、自ら道を開いたのかも知れない。少なくとも、そのお陰で心積もりができたのではないだろうか。学校の改善に特別な思いを抱かせたに違いないのだから。」(B89f.)ズルツァーの自伝の記述からは、ベルリンに呼び戻されたあとと暫く待たされたとの実感が伝わってくる。「こうして私は改めて国王に仕えることとなった。しかし、まだ何もすることがなかつた。新しい貴族学院がまだできていなかったからである。」(L40)
- ⁵⁵ Vgl. Nicolai, a.a.O. S.241f. 「このアカデミックな貴族学校の創立は、1763 年に終結したヨーロッパの半分との 8 年にわたる戦争のあと、フリードリッヒ大王が享受できた王家の余暇の最初の産物であった。王は選び出された貴族の生まれの若者を、国家や戦争において大いなる仕事をする者に育てさせようとした。そして、幾つかの学校を開設することがこの目的にとって最適だと考えた。その結果、1763 年に 15 人の若き貴族が幼年学校の生徒の中から選ばれて、4 名の傅育官 (Gouverneur) の監督下に置かれた。その数は後にさらに 2 名増やされた。彼らには専属となるフランス人の教授や教師がつき、諸言語、歴史、数学、国家学や戦争学、諸芸術を教えた。宗教教育は幼年学校の説教師に委ねられた。王は、ブライテ・シュトラーセの王家の厩の向かい側に部屋を準備させ、ハイリゲガイストシュトラーセとブルクシュトラーセに巨大な建物が完成するまでの間、そこに彼らを家庭教師とともに住ませた。・・・教授たちはハイリゲガイストシュトラーセの建物の一部にすでに住んでいる。」
- ⁵⁶ ブランケンブルクによると、ギムナジウムの監督官を退いたのと同じ 1773 年の秋、病気がちなため貴族学院で授業をすることがもはや困難となり、そのことを国王に書簡で伝えている。国王からの返事は、代わりの者を、とりわけ同郷人の中から自分で探すようにというもので、これが国王がズルツァーに求める最後の仕事だと付言されていた (B119)。しかし、75 年に旅の途上でアカデミーの哲学部門の長に指名されたことを知るの、先に述べた通りである。
- ⁵⁷ Körte (Hg.): Briefe der Schweizer Bodmer, Sulzer, Gessner, S.413
- ⁵⁸ Johann Georg Sulzer: Entwurf der Einrichtung des von Sr. Hochfürstl. Durchl. dem Herzoge von Curland in Mitau neugestifteten Gymnasii Academici. In: Johann Georg Sulzers vermischte Schriften. Zweyter Theil 1781, S.145-214
- ⁵⁹ Allgemeine Deutsche Biographie. Hrsg. von der Historischen Commission bei der Königlichen Akademie der Wissenschaften. 1912, Bd. 37, S.146
- ⁶⁰ Körte (Hg.): Briefe der Schweizer Bodmer, Sulzer, Gessner, S.159f. ; Vgl. Hering, a.a.O. S.290f. 「スイスから戻ったあと、ズルツァーは花嫁をベルリンの住まいに迎えた。相当な金額の持参金があったので、すぐに自分の家

- を建てることができた。2つの川の間、王宮に近いところに、国王に聞き届けられて手にした一片の土地があり、そこに建てた。ここで彼は、水と木々に囲まれながら、エピクロス庭を再現しようとした。」
- ⁶¹ Körte (Hg.): Briefe der Schweizer Bodmer, Sulzer, Gessner, S.159
- ⁶² ニコライはバックホーフについてこう書いている。「確かにバックホーフは、シュプレー川の向こう側、ポメラントエンブリュッケの袂にあったが、そこもケルンだと見なされていた。何故なら、1749年にバックホーフとして設えられた半円形の建物は、かつてはルストガルテンのオランジェリーだったからである。いま述べた橋（ポメラントエンブリュッケ）の名前がそこから来ていることは間違いない。この頃、城壁が撤去された後に、新しい家々がバックホーフの背後に建てられた。」今は大聖堂とナショナルギャラリーの間は通り（Bodestraße）になっているが、当時はそこにも川が流れていたもので、その川の向こうでもケルンになると言われている。ポメラントエンブリュッケは、現在のフリードリッヒブリュッケに当たる。Vgl. Nicolai, a.a.O. S.50 添付のベルリン地図も参照のこと。
- ⁶³ Körte (Hg.): Briefe der Schweizer Bodmer, Sulzer, Gessner, S.168f. ; Vgl. Ha143 ヒルツェルは、註 60 の手紙とこの手紙を1つにして引用し、その際日付を「1751年12月20日」と書き誤っている。
- ⁶⁴ Hering, a.a.O. S.291
- ⁶⁵ Georg Holmsten: Die Berlin-Chronik. 1984, S.159 「モアビート」というこの地の名は、聖書の「モアブの地」と関係している。
- ⁶⁶ Folkwin Wendland: Berlins Gärten und Parke. 1979, S.156f.
- ⁶⁷ ibid. S.157 そこは後にポルスィヒという企業の工場となる場所である。
- ⁶⁸ Wendland, a.a.O. S.156
- ⁶⁹ Johann Georg Sulzer: Allgemeine Theorie der schönen Künste. Dritter Theil. 1793, S.679 銅版画には"Lambert"、"Chodowiecki"の文字が見える。本文の記述と合わせて考えると、前者が描画して、後者が銅版に彫ったものと思われる。
- ⁷⁰ van der Zande, a.a.O. S.62
- ⁷¹ ハルナックによると、七年戦争の間、ベルリンのアカデミーは25000ターラーを節約して蓄えていた。国王の命令でそのお金の一部が、化学実験室の大幅な改築、植物園の囲い込み、アカデミーのすべての建物の修繕に当てられることになった。Vgl. Harnack, a.a.O. S.354, 363
- ⁷² Wendland, a.a.O. S.190f.
- ⁷³ Johann Georg Sulzer: Allgemeine Theorie der schönen Künste. Zweyter Theil. 1792, S.297
- ⁷⁴ ibid. S.297f.
- ⁷⁵ 1787年10月の『ベルリン月報』には、編者の註(A.d.H.)として次のような文章が見られる。「月曜クラブ、これはあらゆる立場の男性からなる会で、月曜の夜にある公共の料理店に集まり、歓談したり、一緒に食事をしたりするのだが、クラブとして有名になることを求めたことはなく、おそらく今初めて公に言及される。」 Joseph von Sonnenfels: An die Freunde des Mottagsklubs zu Berlin. In: Berlinische Monatsschrift 1787 Zehntes Stück Oktober, S.350
- ⁷⁶ James Knowlton: Johann Georg Sulzer and the Montagsklub in Berlin. In: Kevin L. Cope (Hg.): 1650-1850, Vol.8 2003, S.138f.
- ⁷⁷ Körte (Hg.): Briefe der Schweizer Bodmer, Sulzer, Gessner, S.117 ; ラムラーの詩に「かつて若き創立者たちに笑うクラブ (lachender Klub) と呼ばれたクラブ」という一節がある。Vgl. "Johann Georg Schultheß, Pfarrer zu Mönchaltorf, geboren 1724, gestorben 1804" In: Neue Berlinische Monatschrift Dezember 1804, S.429
- ⁷⁸ Leopold Friedrich Günter von Göcking: Fr. Nicolai's Leben und literarischer Nachlaß. 1820 (= Friedrich Nicolai: Gesammelte Werke Ergänzungsbande, hg. v. Bernhard Fabian und Marie-Luise Spieckermann, Bd.1 1999), S.73
- ⁷⁹ ibid. S.74; vgl. Helga Schultz: Berlin 1650-1800. Sozialgeschichte einer Residenz. 1992, 255f. ; 因みにエンゲルは、マイエロトターが学校長になった翌年の1776年にヨアヒムスタール・ギムナジウムの道徳哲学の教授としてベルリンに来て、アカデミーの会員にもなっている。 ; 以下もゲッキングの記述である。「会員の数は24人と定められている。入会会員に関する黒白の球を用いた秘密投票は、ヴェネチア市の参事会で通常行われているのとまったく同じやり方で行われる。黒の球が2つあると、入会できない。会員は毎週月曜の夜、6時から7時の間に、借りられた料理店に集まる。8時に食卓に就き、10時に散会する。チェス以外のことは許されていない。どの会員も好きなだけ外部の者を連れてこられる。たとえドイツのクラブで他に1つ2つ、同じほど長く続いていることを誇るクラブがあったとしても、その場合、このクラブのように、これほど長い年月、静いや食い違いがただの一度も起こっていないという第2のより大きな長所を主張できるかどうか問われる。それに私は、このクラブにゲストとして来られたことのある、ドイツ中に散らばった何百年人もの官吏や学者等の方々に、大胆に返答を求められることもできる。このクラブ以上に率直さが支配している会をご存じですかと。」 Vgl. Göcking, a.a.O. S.74f.
- ⁸⁰ Göcking, a.a.O. S.82 ピースターは月曜クラブの創立が木曜であることに感じた驚きを示しつつも、シュル

- テスとズルツァーの日記からその事実は確かめられていて、それもニコライのお陰であると持ち上げている。
- ⁸¹ *ibid.* S.75
- ⁸² "Johann Georg Schultheß, Pfarrer zu Mönchaltorf, geboren 1724, gestorben 1804" In: *Neue Berlinische Monatschrift* Dezember 1804, S.401-444 以下もその一節である。「55年前、シュルテス氏はベルリンにいた。そして、今日なおも存続している友好的な会の設立を提案した。そのような私的な集まりがこれほど長く続くことは、おそらく稀なことであろう。・ ・ ・ まったく単純に、会員が会話と簡単な食事のために集まる晩が月曜日であることからその名が付いた『月曜クラブ』は、選ばれた人の、数は多くない、会員制の会であるが、誰であれ関心をもった来訪者には開かれている。会員は実業家、学者、芸術家が入り混じっている。政治的、文学的その他の傾向はなく、ただ友好的で気兼ねのない快活な会話を目的としている。」(S.412f.)
- ⁸³ 会の創立から約半世紀後の1798年にラムラーが死去して、ベルリンには創立時からの会員がいなくなり、外国にシュルテスがいるだけとなった。会員は誰一人シュルテスとは面識がなかったが、シュルテスに手紙が送られ、それが文通へと発展し、さらにシュルテスからその息子へと受け継がれた。そこに採録された3通の手紙のうち最後のものは、父親の死と最期の日々の様子を伝える息子からの手紙なのだが、その手紙には、1803年の夏に、子孫のために人生の主な出来事を書き留めるよう父親に頼み、それを受けてシュルテスが簡単な言葉で書いた文章のうち、ベルリンと月曜クラブに関する部分も同封されていた。
- ⁸⁴ *ibid.* S.435f.
- ⁸⁵ Knowlton, a.a.O. S.139,144 ; もっとも、ヴァン・デル・ザンデは「1763年に退会するまで代表であった」と書いている。Vgl. van der Zande, a.a.O. S.56
- ⁸⁶ 本稿の主旨からすると余談になるが、1961年にキートンが行った報告によれば、「月曜クラブ」は2つの世界大戦を乗り越え、ベルリン封鎖の年に場所を西ベルリンのルターシュトラッセに移し、その後も活発に活動しているとのことであった。Vgl. Kenneth Keeton: *The Berliner Motags Klub, a center of German enlightenment.* In: *Germanic Review* 39. 1961, S.152f.
- ⁸⁷ Hering, a.a.O. S.281
- ⁸⁸ *ibid.* S.285
- ⁸⁹ *ibid.* S.285f.
- ⁹⁰ *ibid.* S.287 ; ボドマーの『ノア』をめぐる様々な努力については、ブランケンブルクによる伝記も参照のこと。Vgl. B54
- ⁹¹ Vgl. Knowlton, a.a.O. S.145f. ノールトンは、ズルツァーとラムラーが月曜クラブの代表と副代表に当たることもあり、この新聞は月曜クラブの機関誌と言えるだろうかという問いを立てている。ノールトンの論文では、紙名が"Critical Nachrichten aus dem Reiche des Geschmacks"と記されている。
- ⁹² Hering, a.a.O. S.287
- ⁹³ Knowlton, a.a.O. S.146
- ⁹⁴ Hering, a.a.O. S.288
- ⁹⁵ ズルツァーの『学問論』の初版はベルリンに移る前の1745年に出版されているが、その初版には、第2版以降と異なり、芸術に関する記述が乏しいと言われている。この点についてヘリングは、次のように述べている。「それ故、ズルツァーは、趣味の改善のためにスイス派の教えをこの地[マクデブルク]で広めようと、スイス派の使者としてドイツに来たというのは正しくない。・ ・ ・ 彼はただ神学者や自然科学者であったに過ぎず、美学者はこの地で得た刺激があって初めて生まれてきたのである。」Vgl. Hering, a.a.O. S.271 ; ヒルツェルも、「実際ズルツァー氏は、マクデブルクに来るまでは、芸術を知る機会があまりなかった」と伝えている。Vgl. Ha74
- ⁹⁶ Samuel Gotthold Lange(Hg.): *Sammlung gelehrter und freundschaftlicher Briefe. Erster Theil.* 1769, S.306f.
- ⁹⁷ Vgl. B71f.
- ⁹⁸ Vgl. L35 「私は冬の間中、数年前から構想していた著書に取り組んだ。これは後に『芸術の一般理論』というタイトルで日の目を見ることになった。」
- ⁹⁹ 1772年にライプツィヒで若きガルヴェに会った時、ズルツァーは、自分が美学事典の完成前に死んだ場合、ガルヴェならそれを完成させられるだろう、と感じたという。Vgl. Hb199f.
- ¹⁰⁰ Vgl. Hb203f.
- ¹⁰¹ van der Zande, a.a.O. S.62
- ¹⁰² Wolfgang Riedel: *Erkennen und Empfinden. Anthropologische Achsendrehung und Wende zur Ästhetik bei Johann Georg Sulzer.* In: Hans-Jürgen Schings(Hg.): *Der ganze Mensch. Anthropologie und Literatur im 18. Jahrhundert.* 1994, S.411